

アルフォンス・デーケンのデス・エデュケーション

—日本における受容とその後の展開—

横関 祐子

日本大学大学院総合社会情報研究科
長野看護専門学校

Alfons Deeken's Death Education

—Acceptance and Development of Death Education in Japan—

YOKOSEKI Yuhko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies
Nagano Professional School of Nursing

Alfons Deeken, a German philosopher and also a priest, is the first person to bring Death Education to Japan. He worked for Sophia University, and is a professor emeritus. At the age of 83, when this paper was written, he was still giving lectures and writing books. First, I describe his life and how his Death Education developed. Then, I introduce three Japanese who he influenced through the Sei-to-Shi-wo-Kangaeru-Kai(the Japanese Association of Death Education and Grief Counseling). I go into the details of their acceptance and practice of Death Education.

1.はじめに

アルフォンス・デーケン (Alfons Deeken) は、日本において、初めてデス・エデュケーション (Death Education) を提唱したドイツ人である。デーケンは哲学博士でありイエズス会司祭でもある。本稿執筆時 (2015) 83 歳、上智大学を退職以降も、執筆活動や講演会活動にと多忙な毎日を送っている。本研究では、日本に骨を埋める決意で活動を続けるこのドイツ人を取り上げ、彼の提唱したデス・エデュケーションの成り立ちと、その受容の過程とその後の発展について明らかにすることを目的とする。

最初に「デス・エデュケーション」(Death Education) の意味を説明しておきたい。デス・エデュケーションを直訳すると「死の教育」である。しかしデーケンはこれを「死への準備教育」と訳した。それは、人間は死ぬ瞬間まで生命ある存在であり、自分に与えられた死までの時間をどう生きるかと考えるための教育という意味で「死への準備教育」と訳したのである。デス・エデュケーションは、そのまま自分の死までの毎日を、どう生きるかの「ライ

フ・エデュケーション」(Life Education) となり、生と死を深く見つめて生きる原点となることを意味している。

デーケンは、上智大学の「哲学」の授業の中で、学生相手にデス・エデュケーションを行っていたが、一般の人々にも、死を考える場が大切であると考えていた。それが実現されたのが、1982 年に開催された「生と死を考えるセミナー」である。このセミナーは翌年、「生と死を考える会」という市民団体の結成につながっていく。本研究は、デーケンのデス・エデュケーションのバックグラウンドを考えるとともに、「生と死を考える会」で学んだ人々が、どのように実践、行動していったのかについて、3 人の日本人を通して論じていくこととする。

2. デーケンのデス・エデュケーションのバックグラウンド

2.1 司祭の養成期間を通して

デーケンはフランシスコ・ザビエルやカール・ラーナーからの影響を受け、将来は大学レベルで教えた

いという思いがあり、教育修道会として世界に多くの教育機関をもつイエズス会に入る。デーケンはこのイエズス会の司祭養成を経て司祭として叙階されている。司祭養成の諸段階と照らし合わせながら、デーケンのデス・エデュケーションのバックグラウンドを概観してみたい。

1) 修練期 (1952 年 4 月～1954 年 4 月)

世間から一時離れ、修練院の中で自分を見つめ、深く知るための初めての時間を過す。生活の中心は何より祈りである。デーケンは 19 歳から 21 歳までの間ドイツのエリンガーフェルドにあるイエズス会ノビシアート Jesuit Noviciate で生活をする。デーケンは、ルドヴィコ・茨木やフランシスコ・ザビエルの文献・記録書から影響を受け、日本に行きたいという希望をもつことになる。そしてその希望が通り、日本をミッシェンの対象としていた北管区のエリンガーフェルドの修練院で過ごすことになった。

2) 哲学期 (1955 年 8 月～1958 年 7 月)

この期間は神学を学ぶ前のステップとしてあり、哲学と語学に集中し、考察力、体験を深める能力、他者へ伝える能力等を養う。デーケンはミュンヘンのベルヒマンズーコレグ Berchmans-Kolleg で、哲学とドイツ文学を学ぶ。ここで、彼は後に多くの影響を受けるガブリエル・マルセルの講義を直接受けることになる。また、この時期に、デーケン自身が、イエズス会に入る契機としても挙げていたカール・ラーナーにも実際に出会っている。加えてデーケンは、ベルヒマンズーコレグで学ぶ傍ら、ミュンヘンの病院でボランティアとして働く。このとき、東ドイツからの亡命者に出会い、死生学を学ぶ決心をする。そしてこの哲学期では『Die Tugendlehre des Thomas von Aquin』(トマス・アキナスにおける徳の教え)の修士論文を書き上げ、哲学の修士を取得する。

3) 中間期 (1961 年 4 月～1962 年 3 月)

中間期の目的はイエズス会員の考え方や行動様式を実際の宣教活動の場で習熟し、人間として、また修道者として、キリストにおいて成長し、一致することを得ることにある。イエズス会の学校などで過ごし、実際に使徒職に生きる現場の先輩会員と共に生活する。デーケンは 1959 年、フランスのマルセイユ

ユから貨物船に乗り込み来日した。イエズス会の日本語学校(横須賀市田浦)で日本語を学んだ後、上智大学非常勤講師として、主に英語を教えた。また、留学生の寮の副館長と、当時の上智大学の理事長 Klaus Luhmer の秘書を務める。「三つの仕事をこなしていた中間期は非常に多忙であった」とインタビュー(2014)では語っている。

4) 神学期 (1962 年 4 月～1966 年 2 月)

神学期は司祭への準備の最終段階である。自分自身にとって確固たる信念となったイエスとその福音が神学の知識によって裏打ちされる期間である。デーケンは上智大学大学院神学研究科にて、神学を学ぶ。神学研究科においての修士論文は『The ethics of Watsuji Tetsuro』(和辻哲郎における倫理学)である。そしてデーケンは 1965 年 3 月 18 日、東京教区のカテドラル大聖堂で司祭に叙階された。講演会や著書で自身を「メイド・イン・ジャパンの神父」と語るの、神学期を日本で過ごし、日本で叙階されたからである。

5) 第三修練 (1970 年 4 月～1971 年 3 月)

叙階後、30 日間の霊操を行う。現場で人々に奉仕をする中で、養成中に得た学識、体験が十全に統合されていく。デーケンは、アメリカのフォーダム大学大学院在学中、学業を中断して、アメリカのオレゴン州のポート・タウンゼントにあるイエズス会の修道院で第三修練を受けた。

2.2 ベルヒマンズーコレグ在学中に出会った 3 人

1) 東ドイツからきた亡命者

デーケンは、ベルヒマンズーコレグで哲学を学ぶ傍ら、病院のボランティアとして働く。その際、当時の東ドイツから西ドイツに亡命してきた末期ガン患者がいた。家族は向こうに残したままで身寄りがなく、医師から「亡くなるまでの約 3 時間程度、傍にいてあげてください」と言われた。初めて出会った末期がん患者を前に、デーケンは何をしたらいいのかわからなく困ったが、一生懸命に考えた末、辿り着いた答えが、モーツァルトの「レクイエム」のレコードを流しながらの「祈り」だったという。デーケンにとってこの 3 時間は人生の中で最も長い 3 時間であり、生と死について深く考えさせられた。

そしてこのとき、自分は系統的な学問として「死生学」を学ぼうという決心をしたのである。

2) ガブリエル・マルセル

近代における科学と技術が大きな発展を遂げていく中で、人々はものを所有し、所有を増やしていくことが人生の目標になってきた。客観的に見えるものを重視する一方で、「神秘」に対する関心は薄れ、近代は人間物化、人間疎外の傾向があることをマルセルは示唆している。デーケンはマルセルから直接講義を受け、「何を持つかということの代わりに、自分自身がどんな人間であるかということの方に重点を置く生き方。所有よりも存在。それが大事だと、マルセルは、説いています。」¹と述べている。そこにどのように存在するか、その存在の仕方によって価値を見出していくことである。デーケンは、日本の医療が高度化する中で、主体はあくまでも患者であり、価値観の見直しと再評価の必要性を説くとともに、病院の隅に置きざりにされていた患者のヒューマンティーの回復ということにつなげていった。

またデーケンはキューブラー・ロスの「死のプロセスの5段階」に、6段階めとして「期待と希望」²を示しているが、これはマルセルからの「希望の哲学」や「愛と死の永遠」からの学びを応用していると考えられる。

3) カール・ラーナー

ラーナーは、諸宗教がその信者たちに純粋な救いを提供できるとしながらも、キリスト教の明確さを主張する包括的な態度をとっている。そして他宗教を評価するにあたり「無記名のキリスト教 (Anonymes Christentum)」³ということばを使い表現した。

デーケンは、ベルヒマンズーコレグ在学中、ラーナーとの対話において「ラーナーは、キリスト教を含む諸宗教との対話が重要であり、ホスピスや福祉活動に力を入れていく必要性を話していた」と語っている。デーケンはインタビューにおいて、最も心に残る日本人の一人に瀬戸内寂聴を挙げている。「天台宗の尼僧である彼女は、私の活動 (デス・エデュケーション) を応援してくれた」とも語っている。実際に1992年の「生と死を考えるセミナー」で、瀬戸内はパネラーとして講演をしている。仏教とキリ

スト教は教義的なものに相違はあるが、時間を超えた永遠への志向、イエスの「愛」と仏の「慈悲」を通じた生の価値の発見や、根源的な希望を見いだすという、深いレベルでわかりあえるものはあると考える。デス・エデュケーションという枠組みの中で、瀬戸内は、死をみつめることは、最後までどう大切に生き抜くかということに、共感していたのではないかと考える。このようにデーケンは宗教者同士、お互いに相手の立場を尊重しながら、宗教観の対話の重要性や、他宗教を含めたデス・エデュケーションが日本に浸透していくことを望んでいたと考えられる。

加えてデーケンはラーナーとの対話の中でホスピスの原点であるアイルランドのメアリー・エイケンヘッドの活動の話をしている。修道院ではなく、外に活動の場を求めた彼女の活動は、貧しい人々、病める人々を対象として、最期の時に人間らしい優しいケアが行われ、その場所は「ホーム」と呼ばれた。後にデーケンは日本において、ホスピス運動の発展に尽くすが、その根底には、ラーナーとの対話の影響が少なからずあったことが伺える。

2.3 マックス・シェーラーから受けた影響

デーケンはニューヨークのフォーダム大学大学院で博士論文“*Process and Permanence in Ethics – Max Scheler's Moral Philosophy –*”を書きあげている。これは、後に少し書き直して刊行され、アメリカ倫理部門の文学賞を受賞している。その中でデーケンは、シェーラーの「悔恨と再生」について、その思想の中で最も広く称賛されたものに数えられるに違いないと、その独創性を評価している。人生の各段階で人間関係に問題が起こった時、その事実を変えることはできないが、悔恨によって新しい意味を見いだすことができるというものである。このような「悔恨と再生」をデーケンは自らのデス・エデュケーションにどのように応用したのであろうか。デーケンは、自らの著書や講演会の中で、死を目前にして、人間の生きざまを描いた黒澤明監督の映画『生きる』をたびたび紹介している。主人公は何十年も毎日、市役所に勤めてきたが、すべて事なかれ主義で過ごしてきた。ところが偶然、自分が胃がんで、あと半

年のいのちしかないとわかり、苦しみの中で生きる意味を問い直し始めるのである。そして残された日々を子どもたちのための遊園地を作るために奔走する。遊園地ができあがって、彼はブランコに夜1人で乗っている。やがて雪が降りしきるなかで、彼はゴンドラの歌「命短し恋せや乙女・・・」をつぶやくように歌いながら亡くなっていく。この中で、主人公が、限られた時間を意識したとき、今までの「事なかれ主義の自分」に対する悔恨はシェーラーの述べる「存在に対する悔恨」⁴である。主人公は「人間的時間」を意識し、償うかのように子どもたちのための遊園地を作るのである。死期が迫りくる中で、初めて他者への愛を捧げる喜びを知り、深い満足感に包まれて亡くなっていくが、これは主人公の「再生」である。これがシェーラーの述べる「悔恨と再生」であり、デス・エデュケーションの中で、最期の日々をどう生きるかについての示唆を与えている。

3. 日本におけるデーケンの具体的なデス・エデュケーション

3.1 デス・エデュケーションにおける4つのレベル

デーケンは、デス・エデュケーションの柱として4つの観点を述べている⁵。要約すると以下の通りである。

- 1) 知識のレベル: 死に関わりのある多様なテーマを学ぶ。具体的な例で示すと、死のプロセス、悲嘆、告知、安楽死、尊厳死、自殺、死生観などである。
- 2) 価値観のレベル: ひとりひとりが自分の価値観の見直しと再評価を行い、生と死にまつわる、より確固とした価値観を身につけなければならない。
- 3) 感情のレベル: 恐怖や不安といった感情、死を考えることを避けようとする気持ち、死を直視することを避けようとする否定的な感情を自覚して、生と死の問題に対する自らの感情を認識しなければならない。
- 4) 技術のレベル: 死にゆく患者といかにかわるかの技術を学ぶことが大切である。

1)と4)については、認知的側面であり、2)については認知的側面と感情的側面、3)については感情的側面である。デス・エデュケーションは認知的側面と感情的側面の2つの課題があるといえる。単なる知

識だけでは不十分であり、また感情的側面を理解するだけでも不十分である。上述した両側面の理解が必要であると考ええる。

3.2 デス・エデュケーションの15の目標

デーケンにより示されたデス・エデュケーションの目標は全部で15項目あるが、そのうちの一部を示しておきたい⁶。

- 1) 死へのプロセスならびに死にゆく患者の抱える多様な問題とニーズについての理解を促し、終末期にある患者によりよく援助できるようにすることです。
 - 2) 生涯を通じて自分自身の死を準備し、自分だけのかけがえのない死を全うできるように、死についてのより深い思索を促します。
 - 3) 悲嘆教育（グリーフ・エデュケーション）。身近な人の死に続いて体験される悲嘆のプロセスとその難しさ、そして立ち直りに至るまでを理解することです。
 - 4) 極端な死への恐怖を和らげ、その心理的な負担を取り除く働きかけをします。
 - 5) 死にまつわるタブーを取り除くこと。死について自由に考え、話すことができることを目指します。
- 他10項目、計15項目による目標がある。デーケンは哲学者であることから主に哲学を中心とするデス・エデュケーションを成り立たせている。またイエズス会司祭という立場から、宗教という立場からもデス・エデュケーションを成り立たせている。

3.3 上智大学でのデス・エデュケーションの位置づけ

デーケンは、上智大学で「人間学」、「哲学」、「ドイツ文化思想史」、「西洋倫理学思想史」の講義を担当してきている。その中で、デス・エデュケーションは「哲学」の授業で行われた。「人間学」や「ドイツ文化思想史」は、受講生が独文とドイツ語学科の学生に限られていた。デス・エデュケーションは、どの学生も学ぶことができるというデーケンの思いもあり、「哲学」（一般教養選択科目、全学科共通、通年科目）の授業で行われた。「死の哲学」は、1977年（後期）～2002年まで行われた。（但し通年

科目としては 1982 年から)

3.4 「死の哲学」のカリキュラム

25 回のカリキュラムを抜粋すると以下である⁷⁾。

- 第 1 回 哲学的に見た死の意義。
- 第 2 回 死へのプロセスの 6 段階とその理解。
- 第 5 回 悲嘆教育～3 死別体験者の話を聴く。
- 第 13 回 死の歴史—死生観の変遷。—後半に演習「別れの手紙」
- 第 21 回 芸術における死—絵画、彫刻、美術など。後半に演習「もし、あと半年の命しかなかったら」
- 第 22 回 避けられない死と避けられるかもしれない死。交通事故・戦争・民族紛争・核兵器・環境汚染・地雷など。
- 第 25 回 死を前にした人間的成長

デーケンは哲学者、文学部教授、イエズス会司祭という立場から講義を構成した。そのため、哲学、文学、宗教、芸術など死を学ぶ視点の範囲が多岐にわたっている。

3.5 一般を対象としたデス・エデュケーション～「生と死を考えるセミナー」から「生と死を考える会」への発展～

デーケンは、一般向けのデス・エデュケーションの活動として、「生と死を考えるセミナー」を企画する。そのきっかけは、死の訪れが予告されている人々や、病気などに苦しむ人々が、数多くいるという現実が日本にあることであった。このような人々に対して我々は何ができるのか、デーケンは世に問いかけることを目的として企画したのである。セミナーでは、身近な人の死に直面した人々、かつて直面した人々の問題提起を提案した。この提案の裏には、生と死に関心を寄せる人々が、死をみつめることによって生をみつめ、実際に何らかの形で日常の生活の活動に役立てることはできないかというデーケンの思いがあった。

デーケンのデス・エデュケーションの特徴として、キリスト教的価値観はありながらも、キリスト教ということばを敢えて前面に出さず、「日常的な問題」に焦点をあてて、いかに生きるかを考えることにあつた。この考え方は上述したカール・ラーナーから受

けた影響があり、人として死へ向かう準備とはどういうものかを、人間の日常的な問題から出発するというラーナーの視点を発展させたものと考えられる。「生と死を考えるセミナー」の主催は上智大学カウンセリング研究所となり、同大学の小林純一教授が賛同し代表を務めることとなる。「第 1 回 生と死を考えるセミナー」は 1982 年 11 月から 12 月にかけて、上智大学 10 号館 (800 席) にて、5 回にわたり毎週月曜日の夜に開催された。テーマは「身近な人の死を体験する時」であり、講師とテーマのタイトルは以下の通りである。

- 1) 臨床心理学の立場から：霜山徳爾 (上智大学教授)「死に臨む者とその家族」
- 2) 哲学の立場から：アルフォンス・デーケン (上智大学教授)「悲嘆のプロセス—苦しみを通しての人格成長」
- 3) ガンセンターの病棟から：小松玲子 (国立がんセンター婦長)「死を看取る場で思う」
- 4) 作家の立場から：曾野綾子 (作家)〔*テーマについては不明〕
- 5) 経験者の立場から：川中なほ子 (上智大学講師)「家族の死と残された者の生」

当初、このセミナー開催にあたり、参加者不足を案じる声があった。しかし受付開始から 1 週間で既に定員である 800 名の希望があったという。そして実際には定員を上回る人たちがこのセミナーにやってきた。5 人の講師により、「死」というものを正面切って語られたこのセミナーは、多くの参加者の共感を得て、成功に終わった。デーケンへのインタビュー (2014) によると「当時の日本は悲嘆に対するケアが全くなかった。しかしこのセミナーにより、多くの日本人が悲嘆に対する問題意識があることがわかりました」と語っている。そして、セミナーが単に講師からの投げかけに終わることなく、これをきっかけとして、死をめぐっての体験、臨床上の問題、生と死について語り合い、分かち合いながら学習・研究の場を創ろうという気運がセミナーの参加者の中から高まり、ムーブメントとなった。こうして自主的な活動する会として、1983 年 3 月、「生と死を考える会」が発足したのである。

3.6 「生と死を考える会」の目標

「生と死を考える会」は、東京だけではなく、全国に普及していき、2014年には、全国に48の「生と死を考える会」が設立されている。

デーケンは「生と死を考える会」を始めた当初から、以下のような3つの目標を掲げていた⁸。

- 1) 「死への準備教育」の普及・促進をめざします。
- 2) 終末期医療の改善と充実、ホスピス運動の発展に尽くします。
- 3) 死別体験者のわかしあいの場を作り、その立ち直りに向けて、ともに歩みます。

上記の目標は、全国の「生と死を考える会」の目標にもつながっている。2014年、デーケンにインタビューした際に、日本の中で、この3つの目標に対し貢献したと思われる人物、そして自身のデス・エデュケーションとのつながりがあると思われる代表的な日本人を挙げていただいた。次項では、その中の3人に焦点をあて、デーケンのデス・エデュケーションからどのようなことを学び、日本の中で発展させていったのか、述べていくこととする。

4. デス・エデュケーションの受容とその後の展開

4.1 高橋誠の実践

デーケンは上智大学において「死の哲学」を教えていたが、日本の学校教育においても、デス・エデュケーションをカリキュラムに取り入れることを望んでいた。そのような中、デーケンのデス・エデュケーションに興味をもち、「これは今の高等学校教育に必要である」と、授業に取り入れていった人物がいた。それが高橋誠である。

「生と死を考える会」の第1の目標に「『死への準備教育』の普及・促進をめざす」がある。2014年、デーケンにインタビューした際に、この目標に対し貢献したと思われる人物、そして自身のデス・エデュケーションとのつながりがあると思われる人物は誰かの問いに対し、この高橋誠を挙げている。高橋は、慶応義塾高等学校の社会科の教諭であるが、1996年～2006年まで「家庭科」の授業の中で「死への準備教育」を行った。

備教育」を行った。

4.1.1 アルフォンス・デーケンとの出会い

高橋は1994年にデーケンが出演したビデオを観る。これは1993年7月～9月にNHK人間大学で放映された「死とどう向き合うか」というものであった。ビデオの冒頭でデーケンは次のように語っている。「日本人は大変教育に熱心な国民である。学校教育の水準の高さは、世界に誇れるものだと思います。入学や就職といった人生の節目に当たる試験を受ける前には、必ずそのための特別な勉強や訓練に力を尽くします。ところが、人生最大の試練と考えられる死に対してだけは全く準備しようとしません。ほとんどの人が何の心構えもないままで死に臨んでいます。これはどう考えても不思議なことではないでしょうか」⁹。2014年の高橋へのインタビューによると、「言われてみれば、なるほどそうだな」と、このことばに共感したようだった。また高橋は1974年にがんにより父を亡くしている。その際、がんの再発を本人に告知せず、死を迎えたことに、心の隅で後悔の念を抱いていた。この後悔の念が、デーケンのデス・エデュケーションを学ぶきっかけにもなっている。

4.1.2 キューブラー・ロスとの出会い

高橋は死に関する学びを深めていく中で、デーケンの著書の他に、キューブラー・ロスの著書にも触れている。その中で最も彼の心の中に残った本は『続死ぬ瞬間—死、それは成長の最終段階—』(Death The Final Stage of Growth)であった。高橋は、この著書の中で「死」と「成長」ということばに注目した。『死と成長』という常識をくつがえすような、この奇妙な、おかしい結びつきは、初めは全くのなぞに見えました¹⁰と語っている。当時の高橋は、死はネガティブなものであり、人間の人格的成長を促すとは到底考えることはできないと考えていた。しかしキューブラー・ロスは、死に向かってもなお、人は成長することができると語るのである。彼女は、瀕死の患者300人へのインタビュー調査をした。その結果、見えてきたものは、死に向かっていく中で人間の精神的な変化であった。死という人生最大

の問題にぶつかったとき、飾ることのない本当の自分がそこに、みえてくる。そして、かけがえのない時間の中で繰り広げられる、人と人との関わりの中に、人間として成長する物語を見たのである。

高橋はこの著書に出会い、死を直視する重要性を認識していく。そしてこの「死と成長」を、高校生を教える立場として考えるようになっていく。高橋は「死への存在である人間は、いつかは身近な人の死と、自分自身の死に直面せざるを得ません。この避けることのできない危機に直面させられたときに、その苦しみにどう対処していくことができるのかを、子どもたちに教えるのが、この『死への準備教育』でもあり、重要な課題だと思います」¹¹と述べている。また、高橋はキューブラー・ロスが「死はきわめて創造的なひとつの力である。死への思索と研究から生への最高の精神的価値が生れ出るからである。」¹²と述べていることに着目した。死の問題を日本の学校教育現場に取り入れていくことの必要性を高橋は強く感じ始めていた。

4.1.3 慶応義塾高等学校の「家庭科」の授業の討議

そんな折、高橋の勤務する男子高校である慶応義塾高等学校では、男女必修科目となった「家庭科」の授業について論議されていた。「家庭科」という科目が時代の流れとともに、科学技術を視野に入れながら生活という視点から学習することが重要になってきていた。論議の末、「家庭科」は校内の専任教諭が、特殊講義的に授業を行っていくことになった。そして最終的に「家庭科」は4つのオムニバスで構成された。生物の教諭が「食品化学」を、数学と物理の教諭が「コンピューター」を、そして社会科の教諭2人がそれぞれテーマを別々に取り上げるようになった。そのうち1人の社会の教諭は、「消費者問題と家族問題」を、そしてもう1人は高橋が受け持つことになった。当初、「経済の意味とその限界」というテーマを考えていたが、自らが学んでいた「死への準備教育」を思い切って提案し、学校側も未知の分野としながらも受け入れていった。

4.1.4 「死への準備教育」の授業

高校における「死への準備教育」のマニュアルは

当時なかったが、高橋は上述したキューブラー・ロスの著書や、「生と死を考える会」に参加しながら、デーケンの考え方に触れ、手探りで学んでいった。高橋は、「私の『死への準備教育』の道、それは、これまでの社会科教師としての歩みと、決して断絶されたものではなくて、むしろその歩みの中から徐々に準備され、その延長線上に用意されたものであったといえます」¹³と語っている。高橋の「死への準備教育」の中心となるものは、デーケンとキューブラー・ロス、加えて日野原重明の考え方であるが、その肉付けとなっているのは社会科教諭としての理念を結びつけている。高橋は、社会科の教諭として「独立自尊」を自らの理念として教えてきた。「独立自尊」は福沢諭吉のことばで、慶応義塾の建学の精神であるが、高橋が、社会科教育のなかで追求し続けたことはこの「独立自尊の人」の育成であった。これは単なる知識を得ることよりも、「自分で考え、行動する」ことの大切さを説いており、その実践を、教育の中でどう教えていくかが高橋自身の課題であったと考える。当時の社会の中で、「赤信号みんなで渡れば怖くない」という風潮が蔓延しており、学校生活においても福沢諭吉のことばの意味を再認識する時代と感じていたと考えられる。デーケンは上智大学の「哲学」の授業の中で、「デーケンよりdenken、(ドイツ語で「考える」という意味)だ」とユーモアを交えながら語っているが、知識の丸暗記でなく、自分の頭で考える重要性は、この「独立自尊」と結びついていると考える。そして「死への準備教育」の中でも、高橋は「赤信号みんなで渡ればこわくない」を引用しながら、「厳粛な死を前にしたとき『三途の川みんなで渡れば恐くない』とはいえないのである」¹⁴と述べ、死を自分自身の問題として、どう考えるのかということを生徒に投げかけている。

4.1.5 「死への準備教育」に対する生徒の反応

高橋は授業の後、「死への準備教育」の感想として、生徒に「あなたのもつ『死』のイメージは？」という質問をしている。生徒の感想の一部を紹介する¹⁵。
●死はそこですべてが終わってしまうことだと思っていたが、じつは「死＝生きることを意味を知る」

ということだと思うようになった。人間は人を愛し、人のために生きたいと思うことが生きる目的であると思う。

●今までのイメージは暗くてこわい、そして苦しいものだというのが強かったが、授業を受けて死は生と同じ大切なもので、自然体にかえるというイメージが強くなった。死はひとつの始まりなのである。

また、2000 年からは、3 年生を対象とした「介護・福祉ボランティア」の体験学習を試みた。「ピースハウスホスピス」や「白十字訪問看護ステーション」などで研修を行っている。生徒の感想の一部を紹介する¹⁶。

●今回のホスピス及び訪問看護体験で痛感したのは、末期になってから死について考えるのは遅いということである。死を目前にした時、それを正視できるかできないかはそれまでの生きる様による訳であり、その生き様はどれくらい死を意識して生きたかによるのではないか。

●（訪問看護に同行して）実際に、お風呂に入れるところまで見せてもらった。（中略）ご主人はだいぶ耳も遠くなってきたようだが、奥さんと一緒に笑いあっている。この家庭には要介護者がいる、という雰囲気はみじんもない。ごく自然な、幸せな雰囲気があふれている。

高校生におけるこのような体験は「死への準備教育」が知識に留まらず、予防医学、悲嘆教育、人格形成にも発展していったと考える。このように、生徒らが「死」について素直に考え、そこから逆に生きる意味を問う能力を養うことは、受験準備に迫られる今日の日本の教育において、実践的な「生きる教育」に、つながったのではないかと考える。

4.2 山崎章郎の実践

在宅ホスピス医である山崎章郎は、本論執筆時（2015 年）日本を代表するホスピス医の一人である。一般病院の外科医であった彼は、キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』を読んだことが転機となり、ホスピス医を目指す。1991 年、彼はホスピス医として現在の聖ヨハネ会桜町病院ホスピス科部長に就任する。

そして 2005 年にはホスピスの理念を地域へ広げようとケアタウン小平を起ち上げ、現在は地域の訪問診療医、在宅ホスピス医として活躍している。

「生と死を考える会」の掲げる 2 つめの目標に「ホスピスの充実、終末期医療の改善と充実、ホスピス運動の発展」がある。2014 年、デーケンにインタビューした際に、日本の中で、この目標に対し貢献したと思われる人物、そして自身のデス・エデュケーションとのつながりがあると思われる人物は誰かの問いに対し、この山崎章郎を挙げている。

4.2.1 キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』を読んで

山崎は 1983 年 11 月から 1984 年 3 月まで南極海底調査に船医として乗り、南極海への半年間の航海に出た。船に乗り込んだある日、キューブラー・ロスが書いた『死ぬ瞬間』を読んだ。読み始めてまもなく、山崎は、感動とショックで、それ以上、読めなくなったという。『死ぬ瞬間』には、人間としてごく自然で、静かで、尊厳に満ちた死のあり方が書かれていた。山崎は多くの臨終に立ち会ってきた場面を思い起こし、医師としてやってきたことは、一体何だったのかと自問自答していた。そして山崎は、自分のすべき、大切なことが見えてきた。自分の仕事は、患者と家族が永遠の別れをする場面に十分な時間を提供したり、その人らしい生を全うするサポートをすることであるとわかり、以後の自分の行き先が確信されたときでもあった。

4.2.2 八日市場ターミナルケア研究会

船を降りた山崎は、1984 年、千葉県八日市場市民病院に外科医として勤務することになった。日常的な仕事を積み重ねる中で、ある日、山崎は外科病棟の看護師に「末期患者さんたちのケアについて勉強会をしませんか」¹⁷と話を切り出した。その話に看護師たちは、すぐさま賛同した。それは、看護師たち自身も終末期医療に問題を抱えていると考えていたからである。やがてその勉強会は、看護師だけでなく、院内の他の職種に呼び掛けられていった。こうして 1985 年 6 月、医師、看護師の他、検査技師、薬剤師、事務員、栄養士、レントゲン技師、リハビリのスタッフなどが集まって病院内の『第一回ター

ミナルケア研究会』が開催された。多職種がお互いの立場を尊重しながら、「対等に率直に話し合いたい」という山崎の意図が伺えるが、その背景には船上での様々な職種の人たちと共に過ごし、培った人間関係の影響があると考えられる。また多くの多職種の賛同者が集まったのは、日ごろの終末期医療に疑問をもち、様々な職種の視点からも、患者にどう接してよいのか迷っているの参加であったと考える。

4.2.3 「生と死を考えるセミナー」の参加

このように病院内で、八日市場ターミナルケア研究会を開催していた山崎は、あるとき、1985年の「第4回 生と死を考えるセミナー」の新聞の記事を目した。病院内で、八日市場ターミナルケア研究会を開催し、ターミナルケアは何かということを模索していた彼は、早速申込み、毎週1回夕方6時から上智大学で行われていた「第4回 生と死を考えるセミナー」に参加した。このときのテーマは「死に臨む時」であり、アルフォンス・デーケンの他、河野友信（都立駒込病院医長）、加賀乙彦（作家）、薄井担子（千葉大学看護学部教授）、重兼芳子（作家）、久保川恵、上本修、河上妙子、石井良子らが講師として参加している。2014年のインタビューにおいて、「勤め先の病院から3時間かけて行き、3時間かけて帰り、大変であったが、このセミナーには大いに刺激を受け、充実したものであった」と語っている。そして、山崎は「生と死を考えるセミナー」の参加後、「生と死を考える会」にも参加するようになった。

4.2.4 「生と死を考える会」でのグループワーク

山崎は「生と死を考える会」で行われていたグループワークに参加した。最初に興味をもったのは「日本のホスピスを考える」というグループだった。しかし、意見を聞いているうちに、「日本的」ということばに彼は違和感を感じた。ホスピスの理念は、どこの国でも同じはずだと思ったからだ。そこで、別のグループに参加しようと探してみると、医療者への不満、不信感を吐き出しているグループがあり、そこに参加してみた。そのグループでは医師として、いたたまれなかった会話が飛び交っていた。聴いていると、それは医療者側からみても説明不足と感じ

るものもあった。しかし、その多くは、ぬぐいがたい遺族の叫びであった。インタビューにおいて山崎は、「ホスピス医になろうとしたなかで、遺族のその思いをどう汲み取っていくが、自分の課題として明確にみえてきた」と語っている。

そして、山崎は自分の所属するターミナルケア研究会にも、遺族の方の意見が反映されるようなことを入れていると考えた。病院とは直接関わりがなくなった遺族の方々に声をかけ、遺族の立場で研究会に参加してもらうことになった。そして遺族たちは医療への不満や注文などを率直に語ったのである。

この遺族との関わりこそが、山崎のホスピス医を目指す上でのエッセンスとなる。医療者という立場で患者に関わっているだけでは、見えないものがあることを「生と死を考える会」及び「八日市場ターミナルケア研究会」で痛感し、それがホスピスとしての基盤をなしていくひとつとなっている。

4.2.5 著書『病院で死ぬということ』

1988年、山崎は、その後、デーケンがコーディネートしたホスピスツアーに参加する。その際キューブラー・ロスを訪ねるツアーも組まれており、デーケンは通訳として入り、キューブラー・ロスと山崎らの橋渡しの役目をも担っている。その8ヶ月後、山崎は『病院で死ぬということ』の執筆活動に入る。インタビュー(2014)によると「あのとき、悶々とした苛立ちがあり、それが、あの本を書かせた」と話している。その苛立ちの中には、自身の目指そうとしていることがホスピスであると明確になってきているのに、終末期医療の改革や改善には何十年もかかってしまうのではないかという危機感をもっていたことにあった。山崎は、「そこで医療を変える大きな力は医療現場での取り組みもさることながら、むしろ医療を受ける可能性のある人たちが、自分も受けるかもしれない医療の実態を知ること、それらを変える社会運動として取り組んだほうが、実際に医療を変える力を持つ行政を動かしていけるのではないか」¹⁸とこの本に取りくんだのである。そして1990年に『病院で死ぬということ』が刊行される。この本は、大きな反響を呼び、当時、映画化もされている。山崎へのインタビュー（2014）によると現

在までに、この本は、単行本として 75 万部、その後、文庫本化されたものが 20 万部売れ、100 万人に近い人が読んでいるという。更に 1991 年には第 37 回日本エッセイストクラブ賞を受賞している。『病院で死ぬということ』は、日本の一般市民に対し、当時の医療の現状を率直に訴えるとともに、一人の「人間」として「ホスピス」というものを考えてほしいという投げかけであったと考える。そしてこれは 100 万人近い人に読まれていることから、一般市民に対しての「ホスピス」の啓蒙につながったと考える。こうして多くの日本人に読まれたことが、ホスピス運動につながり、ホスピスを実践した山崎に対し、デーケン自身は自身の考えとの一致するものを感じていると考える。

また、山崎は在宅ホスピス医として考える中で、「人生の終末に何が大切なのか」¹⁹と著書で投げかけている。これは、デーケンのデス・エデュケーションの最も核心となるものである。山崎は自身の経験から「いのちが大事なものはまさにその人が人間らしく大事にされているという思いを、その人自身、それからケアをする人、お互いに感じあえてこそそのいのちの大切さではないでしょうか」²⁰と述べている。これは終末期の中で、その人自身とケアする人が近づく瞬間であるとともに、人間にとって、かけがえのない瞬間である。

キューブラー・ロスとの出会いから、ホスピス医を目指す過程の中でのデーケンとの出会いは、よりホスピス医を目指す気持ちを深くし、今、地域という場で大きな広がりを見せ、日本の中でホスピスを根付かせようとしている。

4.3 古谷小枝子の実践

「大和・生と死を考える会」代表である古谷小枝子は、自らの感性を大切にしながら、一市民として、遺族の気持ちを本音で語り合い、分かちあうことをしてきた。古谷は、1973 年に病気により長男を亡くす。その 10 年後に古谷は、デーケンと出会う。古谷はデーケンとの出会いから、紆余曲折を経て 1993 年に「大和・生と死を考える会」を起ち上げ、現在も地域の人たちと死別の悲しみを語り合い、歌や演劇などの芸術活動を通して共に考え、表現する活動

をしている。「生と死を考える会」の掲げる 3 つめの目標に「死別体験者の分かちあいの場を作り、その立ち直りに向けて、ともに歩む」がある。2014 年、デーケンにインタビューした際に、日本の中で、この目標に対し貢献したと思われる人物、そして自身のデス・エデュケーションとのつながりがあると思われる人物は誰かの問いに対し、この古谷小枝子を挙げている。日本において、「大和・生と死を考える会」のような市民レベルでの活動の意味は大きく、2006 年には大和市教育委員会より「教育功労賞」を受賞している。「大和・生と死を考える会」の活動を通して古谷の実践を追っていきたい。

4.3.1 「大和・生と死を考える会」の特色

古谷が代表を務める「大和・生と死を考える会」の活動の主旨をまとめると大きく 2 つに分けられる。

4.3.1.1 語り合う、分かち合う

古谷は「第 2 回 生と死を考えるセミナー」(1983 年)のパネラーとして語って以来、遺族の支えを広げてきた。その中心となるのは、語り合う、分かち合うである。「大和生と死を考える会」では悲しみを分かち合うとき以下の「4 つのお願い」を守ることになっている。

- ・自分のことを語りましょう。他人のことではなく。
- ・本当のことを語りましょう。
- ・裁くことなく、比べることなく、教えることなく、ありのままの姿にお互いに心を傾けましょう。
- ・プライバシーを守りましょう。

以上 4 点である。悲しみの気持ちを分かち合ったり、辛い死別体験を語り合ったりする時に、互いの立場が「癒してあげる」、「癒していただく」という関係ではなく、それぞれが相手の主体性を大切にしてい、対等に関わり合う中で各自が新しいことに気づいていく過程を重要視し、結果的に癒しがもたらされるという関わり方を大切にしている。1999 年までに、レガシー（配偶者を亡くされた人の会）には、のべ 1000 人以上が参加した。デーケンは著書や講演会でドイツの諺を引用し「共に喜ぶのは二倍の喜び、共に苦しむのは半分の痛み」²¹と述べているが、このことばは、知的側面よりも、感情面的側面を支

える重要性を物語っており、上述した語り合い、分かち合いは、このことばに結びついているともいえる。「思い立ったとき、いつでも何回でも来られる場。新しく参加する人には、会員が寄り添う。自分の生き方を見つける人も多いんです」と古谷はインタビュー(2014)で語っている。

4.3.1.2 アートの力

「大和・生と死を考える会」は2000年頃から、芸術活動を始める。死別体験者を中心とする女性コーラス・グループである「コール・アンジェリカ」の合唱は2004年の記念行事の中で初めて披露された。音楽指導については星野敦子の指導を受けている。また2004年には、劇団「犁」と名付けられた演劇活動をする会が設けられ、「アッカーマン・インベーメンー農夫アッカーマン」を演じ、以来、演劇活動を毎年、周年記念講演会の中に取り入れている。演劇指導については、2004年に演出家でもあり元宮城教育大学教授の竹内敏晴の指導を受けている。

上述した語り合い、分かち合う中で、遺族の気持ちの変化として「また先月と同じことを話して泣くのか」と自分がいやになるときがあるという。このときこそが、自分を客観的に見るステップとなる。そして次のステップとして、自己表現をする場所が準備されているのである。歌や演劇など自らアートする心や創造していく精神を発揮することで、感受性が培われ、人間としての感性や感覚、情緒が深められていくのである。歌い方や演じ方が、上手い下手ではなく、歌い手、演じ手が自らの体験を通し、表現することで生気を取り戻していくのである。古谷は「生命倫理とか死生観という分野にまで関わる時、百人百様の生き方、死に方を相手にするわけですから、答えの見つからない問いかけを自問自答してゆくようなもので、科学思考だけで究明することは到底困難です。むしろ科学思考と両輪をなすアート感覚の面から解き明かしていかなければならない逆説的な内容と問題とを多く秘めているということ」を、医療者、関係者に分かっていただきたいと思えます²²と述べている。この「アート感覚の面からの解き明かし」が結果的として、自己回復力に通じているのである。それは音楽や演劇を通し、頭で考えるのではなく、体で感覚を取り戻していく作業で

あると考える。セリフを通して役の立場や思いを察する、そして体を動かすことによって、五感をフルに活用していき、人間本来の「元気さ」を取り戻していくのである。インタビュー(2014)において「歌い、演じることは楽しいことだけではなく、死生観、日本人観につながっているのです」と語っている。自分の人生と演劇のテーマが合い重なって、演じることそのものが、人間の根本的なあり方を考えさせ、生きていく上でのヒントにもなっているのではないかと考えられる。

4.3.2 患者 (Patient) ではなく人間 (Person)、そして悲しんでいるあなたと共にいる

古谷は、常に自分の「感覚」というものを大切に、「大和・生と死を考える会」の活動を通して、これまで市民感覚の視点としての提言を様々なところで行っている。古谷の自由な語り合いとアート感覚を重視する活動は近代科学をモデルとする近代医療の中では盲点となってきた部分である。近代の医療の中で客観的に科学的であろうとすればするほど、患者と医療者の人間としての関係性が薄れていく。しかし古谷は、この盲点となった部分に焦点をあて、死にまつわるさまざまな問題に対する、個々の気持ちや考え方を感じとる感情的側面を重要視してきた。その背景にはデーケンに長男の死を語ったこと、そしてデーケンのユーモアにより救われたこと、パネラーとしてそしてその後も多くの遺族の人たちと分かちあえたことなどがある。そしてデーケンが語る死をみつめること、本当のことを語り、分かち合うことを失わないようにしてきた姿勢がみえる。

一市民としての立場として、古谷は「医療者が人間のいのちや死の問題について考えるとき、人間の心の奥底までうかがい知らなければ解決策が見つからないような問題を多く含むため、医療者や学者、宗教者のような専門的な見地からだけでこの問題を捉えるのではなく、人間の心の機微まで教えている学問分野である人間学や民族学までをも取り込んだ、幅の広い市民感覚の視点で捉えてゆく必要があるように思えます²³」と語っている。実際の医療現場では医療者と患者の関係性は重要であるが、インフォームド・コンセントが浸透してきた今日においても、

未だに、患者は医療に委ね、専門家の判断に従うという患者としての姿がみられる。しかし、古谷は長男を育て、見送った体験の中から自らが感じたことを認め、物事を“感じる”ことをベースにしてきた。療養する長男を見守りながら「末期に及んで本当に必要な検査だったのか」、「現代の医療は患者の、喉の渇きをどう考えているのか」というごく普通の人間としての疑問を堂々と話してきたことが多くの人たちの共感を得てきたのである。それは、病気の切り口から捉える「患者 (Patient)」というよりも、もっと広く「人間(Person)」として捉え、人としての尊厳の重要性を示している。

加えて、古谷は、長男を亡くし、母として悲しんだ経験から、多くの死別体験者と語るとき、「悲しみの中にいる、あなたと共にそこにいますよ」というメッセージを送り続けていた。そして歌い、物語り、演じるというアートは、気分を解放しながら、自分の内面と語り合い、他者への関心と理解を深めている。理屈で考えるよりも、感性や感覚を大切にしていくなかで古谷の活動は、人間の本来もつ「自己回復力」に目を向けた活動であると言える。

5.終わりに

デーケンにインタビューした際、この3人は、どんな印象があるかの問いに共通していたことは「勇気ある人」と「創造的な人」であった。それは「死へのタブー化」への挑戦であり、死というものに真正面から向き合うことで真の自己に目覚め、葛藤しながらも創造的に活動したことであった。デーケンのデス・エデュケーションの播いた種は、それぞれが「自己の使命に気づく」ことで成長していき、日本の各地にその意志・活動を根付かせていったのである。

思想』 第3刷 春秋社 p.157

⁵ アルフォンス・デーケン(2013).『新版 死とどう向き合うか』 NHK 出版 pp.224-225

⁶ 前同書 pp.225-227

⁷ アルフォンス・デーケン(2003).『生と死の教育』岩波書店 pp.162-167

⁸ 前掲『よく生き よく笑い よき死と出会う』 p.231

⁹ アルフォンス・デーケン(1994).『NHK 人間大学 死とどう向き合うか』 日本放送出版協会 p.7

¹⁰ 星雪教育研究会(2000).『星雪 紀要'99 特集 いのちと死』 p.86

¹¹ 前同書 pp.86-87

¹² エリザベス・キューブラー・ロス 川口正吉訳(1971).『続 死ぬ瞬間』読売新聞社 p.26

¹³ 前掲『星雪 紀要'99 特集 いのちと死』 p.80

¹⁴ 富山市立城山中学校(2009).『富山市立城山中学校 職員研修会「死への準備教育」 資料2』 p.39

¹⁵ 高橋誠「慶応高校における「死への準備教育」(2004).『学校保健フォーラム』2月号 健学社 pp.26-28

¹⁶ 慶応義塾高等学校(2011).『2011 年度 「介護・福祉ボランティア」』 pp.14-34

¹⁷ 山崎章郎 (1995).『僕が医者として出来ること』講談社 p.50

¹⁸ 山崎章郎 (1990).『病院で死ぬということ』主婦の友社 p.222

¹⁹ 山崎章郎・二ノ坂保喜 (著)・米沢慧 (編) (2012).『病院で死ぬのはもったいない』 春秋社 p.37

²⁰ 前同書 p.39

²¹ 前掲『よく生き よく笑い よき死と出会う』 p.233

²² 大和・生と死を考える会編 古谷小枝子監修 (2008).『物語ること語り紡ぐもの』木星舎 p.118

²³ 前同書 p.118

脚注：日本大学大学院総合社会情報研究科博士前期課程 2015 年 3 月修了

(Received: September 30, 2015)

(Issued in internet Edition: November 1, 2015)

¹ アルフォンス・デーケン (2009).『よく生き よく笑い よき死と出会う』 12 刷 新潮社 p.86

² 前同書 pp.156-157

³ カール・ラーナー 稲垣良典訳 (昭和 50 年).『人間の未来と神学』 中央出版社 第 1 版 p.95

⁴ アルフォンス・デーケン 阿内正弘訳(2005).『人間性の価値を求めてーマックス・シェラーの倫理